

2013年度近未来チャレンジ論文特集

阿部 明典

(千葉大学)

以下の論文が2013年度近未来チャレンジ論文特集で採録されたものである。

- 松本慎平, 川口大貴, 鳥海不二夫: 東日本大震災前後のTwitter利用者の投稿活動に基づく定量化と自動判別への応用
- 高間康史, 串間 宗, 砂山 渡: TETDMを用いた電子カルテ分析支援ツールの開発と実カルテ分析での検証
- 渡辺健太郎, 西村拓一, 本村陽一, 持丸正明: コト・データベースによるモノ・コトづくり支援

最近, ようやく査読が終わったので, 本誌の発行と掲載が前後するかもしれないが, まあ, 例年程度の数であると思う。

さて, 近未来チャレンジ自体は最近, 成熟化して世間から厳しい目で見られ始めてもいる。チャレンジングという感覚もかなり厳しくなっていると思う。1980年代は, かなり高度な知的処理が提案されてきた。ただ, それが普通には実現するのが難しいとわかると, AIは, 世間から無視されるようになった。

しかし最近, 再びAIは脚光を浴びるようになってきた。これは, チャンスである。さて, 論文に戻ると, 採

録されている論文は, これからの日本に必要な分野や技術を扱っており, それぞれ, 価値のあるものであると思われる。

TETDMは2015年に卒業をかけて最後のチャレンジに臨むが, どうなるであろうか? 2014年は, 実用化へ向けた取組みが卒業に向けた点にやや課題が残ったが, 最終年度にその課題がクリアされていることを期待する。「異種協調型災害情報支援システム実現に向けた基盤技術の構築」や「コト・データベースによるモノ・コトづくり支援」などの2012年に採択されたチャレンジに関しては, より魅力的な提案, 発展, 開発を行うことで, チャレンジに通るだけではなく, 人工知能をどんどん引っ張ってほしい。

さて, 2014年の全国大会では, 新規のチャレンジの採択がなかった。その前の2013年に3件採録されているので, 体制としてはまだ大丈夫ではあるが, 数年に数件のチャレンジが残ると, 人工知能としても, 進展, 活性化されていると思われる。昨年も書いたように「皆さん, チャレンジに応募してください」と言いたい。全国大会でも, オーガナイズドセッションと差別化して, 近未来チャレンジに応募しやすい仕組みをつくっている。したがって, まずは, チャレンジする楽しさを感じてほしい。そして, 先頭に立って, 人工知能を推進している楽しさを味わっていただきたい。